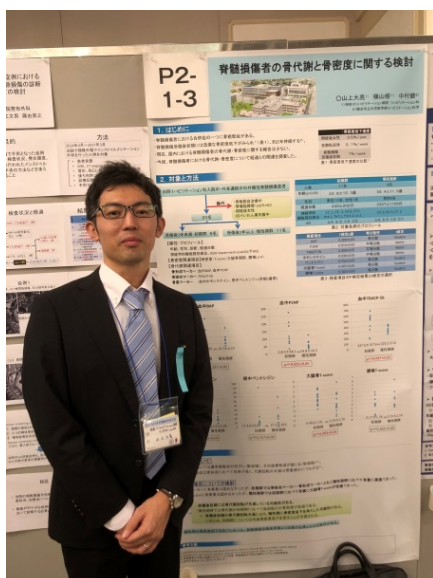


## 第 52 回日本脊髄障害医学会印象記

千葉市にある三井グリーンホテル千葉で 11 月 16 日、17 日に開催された第 52 回日本脊髄障害医学会に参加しました。

札幌医科大学の山下敏彦先生による自家骨髄間葉系細胞の静脈内投与による細胞療法についての特別講演では、2014 年に開始された医師主導治験について現在副作用なく良好な機能回復が得られていることを報告されていました。現在発症から 14 日以内の頸髄損傷のみが対象となっており、今後胸腰髄レベルの脊髄損傷患者への適応拡大も望めます。

また慶應義塾大学の里宇明元先生は、一般にも用いられているクラウド技術を用いたリハ実施中患者のモニタリングとフィードバックや BMI (Brain Machine Interface) 療法の実践など、リハ治療の効率化、高度化を図る「スマートリハ構想」について講演され、新たなリハ治療の形を提言されていました。



シンポジウムでは諸先生方の講演に加えて、全国脊髄損傷者連合会千葉県支部の露崎耕平氏による講演があり、患者目線からの生活体験・仕事などについて語られました。特に印象的だったのは、東日本大震災以降高層ビルにオフィスを構えている会社・事業所が車椅子利用者の雇用に消極的な姿勢があるということでした。

自身では、脊髄損傷者において受傷後初期に骨代謝回転が亢進し、慢性期に骨密度低下を来している可能性についてポスター発表をさせて頂きました。

全体として、再生医療など新しい治療法が現実的になってきていることを感じられましたが、一方で間近に迫る東京オリンピック・パラリンピックへの社会の課題も垣間見えた学会参加となりました。

神奈川リハビリテーション病院 リハビリテーション科 山上 大亮

## 第1回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会印象記

第1回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会が、2017年10月28日（土）～29日（日）に大阪市の大阪国際会議場にて開催されました。これまで春季のみに行われていた学術集会に加え、2017年度より秋季学術集会が開催されることとなりました。当日は台風22号が関西地方を通過中で、交通機関の乱れが心配される中でしたが、全国各地から参加者が集まりました。



私は、2日目の義肢装具セッションで、長期大腿義足使用者ががん発症に伴い義足調整を要した2症例について症例報告をさせていただきました。この症例を通し、がん発症後は進行度、治療、生命予後、本人のニーズを考慮したうえで義足調整を行うことの重要性を学びました。今年度よりリハビリテーション科医として診療に携わる中で、初めて義足調整を経験した症例となりました。症例発表後の質疑応答では、様々な方からご指摘やご助言を頂き、理解を深めることができました。

また、リハビリテーション科女性専門医ネットワーク（RJN）のセミナーにも参加させて頂きました。個人的には医学生時代から参加させて頂いておりますが、今回のセミナーでは、年代や経験の異なる3人の先生方から医学生、研修医、若手医師に向けて、リハビリテーション科医師の実際についてご講演を頂きました。ご経歴、若手医師時代に苦労されたこと、現在の職場環境、仕事と家庭を両立される中で工夫されていること、心構えなど、各々の経験談を踏まえながらお話頂きました。セミナー終了後も全国の様々な立場でリハビリテーション科医としてご活躍されている先生方に直接お話を伺うことができ、自分の今後について考える大変有意義な時間となりました。



今回学会に参加し、まだまだ学ぶことが多いことを実感し、先輩医師との交流を通じて臨床へのモチベーションも高まりました。今後も意欲的にこのような学会活動に取り組んで参りたいと思います。

## 第54回 日本リハビリテーション医学会学術集会印象記

2017年6月8日～10日の3日間、岡山コンベンションセンターをはじめとする6カ所の会場で開催された第54回日本リハビリテーション医学会学術集会に参加しました。

1日目は吉村芳弘先生によるサルコペニアについての教育講演を拝聴しました。近年さまざまな診断基準が提唱されてきており、研究も進んでいるサルコペニアについて、概念から原因、診断方法についてのお話を伺いました。低活動や低栄養、疾患などの原因がある二次性のサルコペニアについては、いかにしてその原因に対処するかが重要だと痛感しました。特に低栄養はサルコペニアとの合併率も高く、適切な栄養管理をした上でリハを行うことが効果的なADL、筋肉量の改善に繋がるということがわかりました。午後にもロコモティブシンドロームやサルコペニアについてのシンポジウムを拝聴し、この分野の研究がとても盛り上がっていることを実感しました。



2日目は坂爪一幸先生による高次脳機能障害・発達障害のある子供の就学・復学支援についての教育講演を拝聴しました。医療者側の疾患理解ももちろん大切ですが、その特性を直接関わっていく教育現場にどう伝えていくかが非常に難しいのが現状です。医療現場・家庭・教育現場の情報共有をすすめ、そのような子供と家族に適切な支援を行える環境を作っていくことが必要不可欠だと感じました。



3日目は痙縮のボツリヌス治療のハンズオンセミナーに参加しました。実臨床の現場でも諸先生方に打ち方を教えていただいておりますが、改めて投与部位の同定方法について学ぶことができました。

今年からは専門医会に変わり秋季学術集会も始まります。今回はスタッフになって初めての学会だったこともあり、まず教育講演などを中心に拝聴していましたが、私自身も発表する立場になることを認識して幅広く学んでいこうと思います。

横浜市立大学付属病院 リハビリテーション科 立花佳枝

## 国際自律神経学会 2017 (ISAN2017) 印象記

1995 年設立された国際自律神経学会 (ISAN International Society For Autonomic Neuroscience) は 2 年に 1 度行われ、基礎と臨床の自律神経学に関する学会です。ISAN のシンポジウムは合計 34 回、そのうち今回を含めて日本開催は 4 回目となり



ます。今回 2017 年 8 月 30 日～9 月 2 日まで日本の名古屋で開催されました。大会長の国際福祉大学の黒澤恵美子会長のもと、「Let's Enjoy the World of the Autonomic Nervous System in the 21st Century from the East to the West」をテーマに開催されました。アドバイザーとして自律神経学会理事長である黒岩義之先生 (現 帝京大学神経内科教授、元横浜市立大学神経内科教授) のご指導があり、

細かな配慮のある学会でした。全イタリアでの ISAN にひき続いて Lewy 小体認知症や Parkinson 病に関する神経内科分野の自律神経発表を多く認めました。また大会長が体性感覚刺激による脳内伝達物質変化を、薬理学を用いて測定を行う研究者です。そのため薬理的な研究報告も例年になく盛況でした。ISAN プログラム委員長が千葉大学神経内科の朝比奈正人教授でした。朝比奈先生は SMON や自律神経を介する血圧調整の第一人者です。自律神経を介する血管や血圧調整の教育講演も勉強になりました。

自律神経研究者はそれぞれが得意とする自律神経測定方法を持ち研究を重ねています。そのため国際学会では自分と同じ手法を用いた自律神経研究者の情報交換の良い機会でもあります。たとえば 4 年前のドイツ Baden で開催された ISAN では HUT (Head Up Test) の実践があり、HUT を使用する研究者が大いに盛り上がったそうです。

私事ながら今回 ISAN は 3 回目の参加になります。(1 回目は SAH のスパズム、2 回目は脳卒中における障害部位、今回はリンパ浮腫に関する自律神経報告でした) 次回は 2 年後の USA California です。自分が飛行機に耐えられるようであればぜひ参加したいです。

今回 3 日間診療をお休みさせていただいた上、参加費用も出させていただきありがとうございました。中村教授はじめ諸先生方に感謝申し上げます。

